13　忘れていたこと

宏が通っているM中学校は、今年度開校三十周年を迎え、文化祭は記念式典も交えて盛大に計画されることになった。宏は、M中学校の生徒会長として、文化祭を自分の手で大成功におさめようと力を入れていた。さらに、文化祭実行委員会組織の執行部としても、ステージ部や展示部、式典部や装飾部などをまとめて進めていかなければいけない立場であった。

「一年生のステージ発表の内容、イマイチなんだよな。拓海、頼むぜ。」

「ああ。でも一年生だし、初めてだからしょうがない気もするんだけどな……。いちおう、一年生の代表を集めて何とかアドバイスしてみるよ。」

拓海は副会長で、宏のことをよくバックアップしてくれる。しかし、宏が一人で突っ走ってしまうところが少し気になっているようだった。

「あと二週間あるから何とかなるだろ。じゃ俺、他の部門の様子も見てくるから、よろしく。」

宏はそう言うと、生徒会室を出て行ってしまった。その後も宏は執行部として全体をまわり、順調に準備が進んでいるかのように見えた。

文化祭の三日前になり、宏は仕上げの段階になっているはずの装飾部を確認しに行った。ステージ部の仕事がひと段落ついた拓海も一緒だった。

「おい咲紀！三日前なのにまだそんなことをやっているか。体育館の装飾終わらないぞ！」

咲紀が担当していた装飾部の仕事が、予定していた装飾の五分の一くらいしかまだ終わっていなかった。宏は咲紀に任せっきりで、久しく装飾部の確認をしていなかったのだ。

「だって、『今、母校に思う』の全校生徒分のコメントをチェックしてから体育館に掲示しろって宏が言うから……。」

「確かに言ったけど、そこに時間をかけなくていいんだって！これじゃ、どう見たって間に合わないよ。」

「……。」

「俺は展示部と式典部の所にも行かなきゃならないから……。とりあえず、手の空いている実行委員を装飾部の仕事にまわそう。拓海、先生に許可もらって放送してくれないか。」

「……わかった。」

その後、各部門から何人かに協力してもらい、何とか予定していた装飾の準備が前日までにできた。しかし、宏は「他の部門のことがあるから」と装飾部に顔を出さなかった。

すべての準備を終え、生徒会役員が生徒会室に集まったとき、宏はまた、咲紀を責めた。

「咲紀。他の部に余裕があったからよかったものの、そうじゃなかったら最悪だったな。俺は装飾部だけにつきっきりってわけにはいかないんだからさ。」

「ごめん……。」

それを聞いていた拓海が、我慢しきれない様子で言った。

「宏、もういいだろ。結局みんなのおかげでいいものができたんだし。宏は咲紀のことを責めるけど、何も手伝っていないだろ。執行部として忙しいのはわかるけど、装飾部のことが心配だったら、少しでも顔を出して様子を見に行けばよかっただろ。自分だけで文化祭をつくってるなんて思うなよな！」

そう言うと、琢海は自分の荷物を整理して生徒会室を出て行ってしまった。宏は、拓海の思いがけない態度に手に汗がにじんでくるのを感じるだけで、何も言い返すことができなかった。学校を出ても足取りは重く、すっきりしない気持ちを抱えたまま帰宅した。

帰宅後、総合的な学習の時間の宿題で、埼玉の偉人に関する新聞を作成し提出しなければならないことに気付いた。

（まずい。今日やっておかないと、班のみんなに迷惑かけちゃうな。）

宏の班は、「塙保己一」について協同でまとめていくことになっていた。一応、資料は集めていたが、まだ整理をしていなかった。

江戸時代に現在の埼玉県本庄市児玉に生まれた「塙保己一」は、七歳で失明してしまうが、驚異的な記憶力で数万冊と言われる古典や古文書を暗記した。古い資料を分類するなど、木版刷りで「群書類従」を出版した。完成にいたるまでに四十一年の歳月をかけている。

しかし保己一は、

「多くの人の協力や支えがあったから為しえたことである。」

と常に周りを気遣い、感謝の気持ちで接していたという。

宏は新聞にまとめているうちに、文化祭準備のことを思い出した。一年生に説明している拓海の姿。生徒のコメントをチェックしている咲紀の姿や装飾を手伝ってくれている実行委員の姿……。そして、今日の放課後のこと……。（みんながやってくれたから……。）

文化祭当日の朝、宏は少し早めに家を出ると、通学路の途中で偶然、拓海と会った。

「宏、昨日はごめん。俺、少し言いすぎた。」

「いや、俺の方こそカリカリしててさ……。」

「でも、俺たち宏には感謝しているんだぜ。」

「感謝？」

「そう、宏が全体を見て指示してくれなかったら、準備がこうは進まなかったもんな。」

「……。」

しばらく歩いて校門に着いた。

「拓海、俺ちょっと先生のところに行ってくる。大切なこと、忘れていた。」

（先生に見てもらっていた今日の会長あいさつの文に追加しよう。）

宏は何かが吹っ切れたような気がして、昨日までとは違う自分を感じていた。